

自主研究会エントリーグループ（届け出順）

名 称	大阪市の市電事業で建設され、保存されている橋梁図面の評価・活用研究会
代表者	松村 博 （大阪市OB）
幹 事	黒山 泰弘 （一財）都市技術センター
テーマ	明治から昭和初期にかけて市電事業によって建設された橋梁の保管図面について、その史料価値を検討するとともに、種々の観点から建設当時の土木技術的評価を試みる。また、土木史的観点から図面の活用方法等について併せて検討する。
概 要	■基本的作業 図面リストの作成、橋の位置の確定、年代把握、関連文献収集、写真の収集 ■図面群の価値の考察と土木史的考察 市電事業との関連から架設年代の推定 当時の技術的背景の考察、特に材料、製作会社、下部工の技術的特徴など 当時の大阪市の技術部局の体制と技術的特徴 デザイン的な特徴とその背景の考察

名 称	道路環境問題研究会
代表者	大井 健一郎 （株）近畿地域づくりセンター
幹 事	徳本 行信 （株）大建コンサルタント
テーマ	道路における環境問題の現状と課題の整理
概 要	道路が環境に及ぼす影響は、大きく、また多様である。ゆえに、古くから多くの分野で、また種々の角度から検討され、対策が講じられてきた。しかし、道路における環境問題は、なくなっておらず、また、どのような対策が、どの程度の効果を示すのか、必ずしも明確になったわけではない。たとえば、交通騒音対策として、遮音壁、低騒音舗装、環境施設帯といった道路構造要素が、大きな効果を示すことは明らかだが、どのような条件で、どれを優先するのがよいのか、他にさらに有効な対策はないのか、発生源対策なども含めた総合的対策の中で、どのような対策が最善なのか、さらに検討を続けねばならない。 そこで、本自主研究会で、様々な分野、立場の研究者、技術者が集まり、道路における環境問題の現状について、種々の情報・意見を交換・収集し、研究課題を整理したい。

名 称	道路空間魅力向上研究会
代表者	佐久間 康富 大阪市立大学大学院工学研究科
幹 事	清水 勝民 総合調査設計(株)
テーマ	道路空間の魅力的な活用に関する研究 ①民間主体による新たな担い手による道路空間の利活用の研究 ②道路施設のあり方やデザイン、全体としての道路景観の研究
概 要	□都市における道路空間利用のニーズの高まりなどから、平成 23 年度に都市再生特別措置法が改正され、道路占用許可の特例や都市利便増進協定制度等、都市再生整備計画に基づくまちづくりに関する官民連携制度の充実が図られ、都市の魅力向上、賑わい・交流創出のための特例の活用や民間の新たな担い手によるまちづくりが各地で進んでいる。また、国交省設置の社会資本整備審議会道路分科会基本政策部会においても、「今後の道路政策の基本的方向」が取りまとめられ、具体的施策の提案部分において道路が有する新たな価値の創造～道路空間のオープン化・多機能化が示されている。 □こうした流れにより、官民連携による良好な道路空間の創出、ひいては都市の道路空間の有効活用によるまちのにぎわい・交流の場を創出（新たなビジネスチャンスの創出）、民間活力の活用による財政支出を伴わないインフラの管理を展開が期待されており、市民・企業・NPOなどの民間主体の新たな担い手による道路空間の利活用が各地で進んでいる。 □民間主体の新たな担い手による道路空間の利活用は、今後、更に活性化が予測される。本研究では、そうした道路空間の利活用を導入、促進するための仕組みやスキームの研究を行い、様々な目的、ニーズに対しての手引きとなるガイドラインの策定を目指すものとする。また、道路空間の利活用を進める上では、（一社）グランフロント大阪 TMO^{（註1）} による地区全体の一体的な維持管理といった事例の通り、サインやベンチなどの施設設置が想定される。こうした施設のあり方やデザイン、全体としての道路景観についても本研究の対象領域として取りまとめを行うものとする。

名 称	梅田ターミナル地域における地下空間サイン研究会
代表者	井下 泰具 大阪地下街(株)
幹 事	高橋 剛蔵 大阪地下街(株)

テーマ	地上・地下・デッキ等により、階層的な歩行者ネットワークが形成されている「梅田地区」を事例として、既存サインや近年の整備事例のふり返し等を行い、災害時やインバウンド対応など新たな視点を加えた、今、都市に求められるサイン（地下街等）のあり方や方向性を検討していくものである。
概 要	これまで大阪市の大規模ターミナルである梅田地区では、地下街等の案内標識の問題（わかりにくさ）に対応するため「(現) 梅田ターミナル地域サイン整備連絡会」を設置し、サインの表記内容・方法、その他設置等に関する「梅田地域共通サインシステムマニュアル」が策定され、この共通マニュアルに沿って、地下街・地下道・公共交通施設（駅）等の各サインが整備されてきた。また、平成15年には大規模ターミナルである難波地区で、交通バリアフリー法による重点整備地区の基本方針が策定されたことを受け、「難波地域サイン整備連絡会」が設置され、ここで策定された「難波ターミナル地域における乗り継ぎ・移動円滑化のためのサイン計画・基本設計」に沿ってサイン整備が行われてきた。 さらに最近では、大阪市営地下鉄の各駅で「実感できるサービスアップ」の取り組みの一つとして、「大阪市地下鉄案内情報統一マニュアル」をベースにサインのリニューアル整備をすすめている。 一方、道路の地上部についてもターミナル地域に限らず、過年度から、道路管理者により歩行者系サインが整備されてきた。 しかしながら、近年では、大地震発生時など災害時の避難誘導やインバウンド対策として来日外国人等にわかりやすいサインの充実が求められている。 また、サインの経年変化に伴う適切なサインの維持管理（データーの更新等）や地上・地下のサインの連携等の充実が求められている。 当研究チームは、多くの施設が集中し、多種多様な目的の来街者が訪れ、地上・地下・デッキ等により、階層的な歩行者ネットワークが形成されている「梅田地区」を事例として、これまでのふり返し等を行うとともに、既存サインや共通マニュアルの問題点・課題等の洗い出しを行い、近年の整備事例や既存のサインを活用しつつ、災害時やインバウンド対応など新たな視点を加えた、今、都市に求められるサイン（地下街等）のあり方や方向性を検討していくものである。